

ディーナーレヴァンシユ 召使いの意趣返し

『皇帝テイトの慈悲』の秘密？

Hayasaka Nanao

七早 緒坂

衣装戸棚からジュースマイアー⁽¹⁾が転がりてきた。「茶でも出してよ」というので、いつものコーヒーを淹れてやった。文句も言わずに飲み始めた。やっぱり二一世紀はすごいね、なんて、ひとしきりガスレンジを褒めた。それからステレオとDVDに興味を示した。ちょうど聴き始めてから十何回目かの『テイト』がかかっていた。コンヴィチュニー演出の二期会公演の、ちよつとした翻訳を手伝ったときにセツトしたままだった。ジュースマイアーがにやにやしながら言った。

「なにか気に入った曲でもあった？」

えーと、No.7のセルヴィーリア〔セストの妹でアンニオの恋人〕とアンニオ〔セストの友人〕の二重唱なんか、ちよつ

とかわいい。(譜例1)

「ちよつとかわいい？ あれは皇帝からの求婚をことわる歌だよ。もつと深刻そうな曲になってもよかったと思わない？」

うん。そうかも知れないけど。それから、No.21のセルヴィーリアのARIAも。(譜例2)

「またセルヴィーリア。あの曲も、良いのは後半でしょ？
そもそも、曲が短い」(なんだか、ジュースマイアーが妙に逆らっている。)

(ボクも内心、あんまり面白い曲はないなあ、と思っていた。でもモーツァルトをけなしたりしたら自分が音痴だということになるから、黙っていたんだ。)

「たとえば、夏のヴェネチアのサンマルコ広場で楽隊が
気持よく演奏している曲に、一曲でも『ティト』の aria
が入っているかい？」

うーむ。そりゃあ、オペラ・セリアなんだから、オペレッ
タのヒット曲のような具合には行かないでしょう。

「じゃあ、はっきり言うけど、ヴィテツリア（先の皇帝
ヴィテツリオの娘）の aria。殺された父の復讐を誓う歌だ
よ。それがどうして、『魔笛』の夜の女王の aria——あれ
は何に怒っているのかよく分からない歌だ——に遠く及ばな
いくらい、詰まらないんだ？ ティト（ローマ皇帝）の ari
アだって、ザラストロの堂々とした歌とはまったく別物だ。
そう思わないかい？」

えーと、それは『魔笛』のほうは何回も聴いているうちに
聞きやすい名曲になってしまふこともあるし……。

ジュースマイアーさん、あなたはつまり、『ティト』の曲
は出来が悪いと言いたいわけ？ モーツァルトがいよいよ引
きつけた、やつつけ仕事だとか、手抜き仕事だとか言われて
もいるけど？

「ヴォルフイ……じゃない、モーツァルト先生が手を抜い
て、テキストに作曲なさったら、もっと名曲がいくらでも出
来たと思うね。」

どういうこと？ つまりモーツァルトはわざわざ詰まらな

い曲を作った、と言いたい？

「君にも分かるように、たとえば『フィガロ』のケルビー
ノの aria（と、アップライトをガンガン弾きだした）。単
純なメロディーで始まって——途中であれよあれよと転調し
て——いつの間にか元に戻る。あるいはアルマヴィーバ伯爵
や伯爵夫人の aria は、盛り上がってくると——アレグロに
変わって早いテンポで歌い上げる。そういうのが『ティト』
にあるかい？ これが『魔笛』と同じ時期に同じ作曲家が
作ったものとは思えないんじゃないか？」

ありますよ。No.19のセストのロンド。ちゃんと途中からア
レグロになり、それから Più Allegro に加速されてる。（譜
例3）ほかに……

「たとえは、No.16のプブリオ（近衛長官）の aria をみて
ごらん（と、ベータースの Klavierauszug をガサガサと広
げた）。犯人のセスト（ティトの親友）を咎める歌だよ。こ
れが単純きわまるハ長調で始まり、途中の9小節だけト長調
に移調して、またハ長調に戻る。まるで素人が作曲したよう
な、輝きも魅力もない曲だ」（譜例4）

まあ、プブリオは、実直そのものの感じで、こんなので丁
度いいのかもね。

「じゃあ、No.23のヴィテツリアの aria は？ 前半のラル
ゲットはまあそれなりとして、アレグロの部分は一見すると

起伏に富んでいる。いや、起伏がヘンなんだ。高音は2ポイントにおよび、低音はトまで下がる（2オクターブ以上）。しかも往々にして2点ニから1点ニに飛び降り、トから2点ニに飛び上がる。つまり歌手は低音を地声で、高音を裏声で、めまぐるしく、あきらかに無様に、モーツァルトに引きずり回されつつ歌う。そしてメロディーは——まるで魅力的でない（譜例5）

時間がなかったためでは？ 七月中旬に引きうけて、九月六日には初演だった。

「先生は四幕の『フィガロ』をほぼ六週間で作曲したんだ。生徒のレッスンを午後に戻してね。『テイト』は二幕で、しかも八月にはブラハに行っていたからレッスンもなかった。もとも、八月二八日到着だから、初演まで八日しかなかった。でもほら！」（と楽譜を示した。『テイト』の厚さは『フィガロ』の四分の一だった。）

コンヴィチチュニーはレツィタティーヴォとクラリネットのフレーズを評価していたけど。

「本当かい？」（と嬉しそうに楽譜をガサガサめくるが、ペーターズ版にレツィタティーヴォの譜がないので、ちよつと残念そうに閉じる。どうやらハンブルク公演のプログラムは読んでいないようだ。）

ジュースマイアーさんは、レツィタティーヴォ部分を作曲

したんでしょ？

「あれはモーツァルト先生の作品ですから、それで充分です。ま、レクイエムはシュタンズイ、じゃない奥様の命令でお手伝いしたけどね。」

正直いって、レツィタティーヴォ・セッコの部分のほうが雄弁な感じがする。バセットホルンのオブリガートは伴奏譜にもずいぶん取り込まれているよね。

「シユタードラー〔初演時のクラリネット奏者〕と先生とは、六年前からロッジでの付き合いもあったしね。⁽²⁾あのクラリネットのオブリガートを聴いたら、先生が病気で弱っていたために作曲できなかった、なんて思えるはずがない。」

うーむ。ますます分からなくなった。つまり、モーツァルトは時間不足のためでも、病気のためでもなく、あの面白くないオペラを作曲した。故意に。……

レオポルト二世になにか恨みでもあったわけ？⁽³⁾

「フランクフルトの戴冠式の一件を知らないのかい？」

ヨーゼフ二世が死んで、弟のレオポルト二世が神聖ローマ帝国皇帝になった、その戴冠式がフランクフルトで一七九〇年一〇月にあった。ウィーンから一〇名以上の音楽家が帯同したが、モーツァルトは喚ばれなかった。いいかい、ダ・ポテンテが《ウィーンの傑出した二人の作曲家》に挙げたモーツァルトが十数名の音楽家のなかに入らなかったんだよ。や

〔譜例〕

- (1) *Andante*

 Ach, ver- zeih, du Auser- wählte, dass ich, ach, noch mein dich nen-ne;
Ah, per- do-nal pri-mo af-fet-to questo ac-cen-to scon-si-glia-to;
- (2)

 sind nicht das Mit- tel, sind nicht das Mit- tel, das ihn be- freit,
tut- to il tuo piangere, tut- to il tuo piangere non gio- ve- rà.
- (3)

 Das ist mehr als To-des- zagen, ja noch mehr als Höl-len- pein,
Tanto af-fun-ne soffre un co-re, nè si, mo- ve di do- lor,
- (4)

 Oft stürzt in Reu-e ein fal-scher Schmeichler den, wel- cher Treue nicht bre- chen kann;
Tur- di stu- ve- de d'un tra- di- men- to chi mai di fe- de man- car- non sa,
- (5)

 mei- - ner Pein, ihr wein- - - - tet, ihr
me, pie- tà di me, di
 wein- - tet mei- - - - - ner Pein, ach! ihr
me pur a -
- (6)

 o so nehmt mir mei- ne Kro-ue, o - der nehmt dies Men- schen- herz!
o to- glie- te- mi l'im- po- ro, o a me du- teun ul- tro cor!

むなく先生は自腹で馬車をやとってフランクフルトの戴冠式に駆けつけるが、そこでの仕事もまるでなく、マイナスで帰途についた。讒言ざんげんがあつたに決まっているよ」

サリエリとか?と訊くと、ジュースマイアーはざつと半ダースほどの名前を挙げた。ふうん。ろくな仕事もできないで、ヒマに任せて悪口を触れ歩く連中の言うことを、鵜呑みにする人はどこにでもいるんですね。(ジュースマイアーは、おや、という顔をしてボクを見つめた)

「うん。ヨーゼフ二世は、それでもなかった。というか、先生はヨーゼフ二世に何度も助けられている。とにかくヨーゼフ二世は《なにかあるな?》と勘づいて、周囲に訊くことができた。そこが全然違うところだ。皇帝テイトも《たのむ、腹を割って話せ》⁽⁴⁾なんて、真相究明に努力する姿を見せるだろうか? あそこは先生もちよつと力を入れたんじゃないかな?」

そうか。レーオポルト二世は、兄貴ほどの皇帝ではなかったわけね。

「ヴォルテールが褒めた第二の台詞を、先生がカットしたのは当然だよ。レーオポルト二世はそういうレベルじゃなかった。それにビルニッツ宣言(6)もあつたし。」

宣言から初演までには一〇日ほどしかなかったもの、関係ないんじゃない?

「一〇日もあれば、いくらでも書き直せるよ。でも、書き直すまでもなく、はじめからあんな調子だった。まあ、アンニオ、セルヴィーリア、セストはまあまあとしても、ヴィテリアとテイトの aria はどれもいただけない。ここ、ここ! (と No. 20 のテイトの aria の最後を指さして) 《余の王冠を取り去り給え、さもなければ、この心臓を!》なんて歌っているけど、まったくそういうメロデーじゃない。馬鹿か、と思つてしまふ」(譜例 6)

そう、そこはコンヴィチユニーも「テイトは本気で言つていないし、体制を変えるつもりもない」と解説して、新国立劇場では《どなたかお医者さんはいませんか?》とやったんだ。

……するとつまり、モーツァルトは戴冠記念のオペラで「レーオポルトよ、あなたはただの、凡庸な王にすぎない」と伝えていた、そういうわけ?

「そんなこと、私は言えませんよ。口が裂けても。そもそも、どうやって証明するんですか? どうにもスイング感がない、とか? 曲のどの部分が作曲家の悪意だと、誰に言えるんです? でも、先生は二六日後に『魔笛』を初演した……君! 君たち二世紀の聴衆は DVD で両方を一日で聴けるんだらう? 《耳のあるものは聴くがよい》とはこのことだ」

すると、皇后マリア・ルドヴィカが *una porcheria tedesca* (ドイツの汚物) と呼んだのは、『ティト』そのものというように、一見立派なオペラ・セリアを作りつつ、足のつかないやり方で、気の抜けた作品にした「先生」のやり口のことだった？

「かりにそうだととして、何がわるいんだい？ 先生は常々、自分は召使いだと言っていた。召使いというのは、相手のニーズに応じて力を尽して相手を幸せにする、立派な仕事だ、とも言っていたよ。ただし酒手次第でね。《王は国家第一の従僕なり》とは、有名なフリードリヒ大王の言葉だが、次の一句を知っているかい？ 《そのため、王はもつとも多くの報酬を受ける》というんだ。で、先生はどんな報酬を受けていたか？ 帝王室宮廷楽長の称号はもらったけれど、通常二、〇〇〇グルデンの年俵が、モーツァルト先生の場合だけ八〇〇グルデンに値切られていたんだ」

だからってそんな……皇族を怒らせるようなことをしたら、結局自分の首をしめることになるんじゃないのか。

「『フィガロ』の場合もそうだが、普通、作曲の注文は皇帝が下すし、上演後に皇帝からギャラをもらっていた。でも『ティト』はちがう。依頼主はボヘミア等族(貴族、市民などからなる一種の議会)だし、報酬はすでに決まっている。グアルダツォーニが間に入っているから、いわば何を作って

も大丈夫だった。ヨーゼフ二世は前年に四九歳でなくなっており、当時としては四四歳のレーオポルト二世だって年寄りだったし、実際、翌年には亡くなっている。むしろ問題は戴冠式だよ。白山の戦い(一六二〇年、ボヘミアの新教派の貴族たちの反乱がハプスブルクに鎮圧され、貴族たちは処刑ないし追放)以降ハプスブルクの世襲領になったボヘミアに、レーオポルト二世が王としてくる、これは国会議事堂にマツカーサーが来るようなもんだよ。いいかい、ここで《ザラストロ万歳》みたいの下派手な曲をやったら、無神経というものじゃないかい？ 『フィガロ』と『ドン・ジョヴァンニ』以来、ウィーンよりも先生を鼻(ひ)に(な)して(き)くれた、プラハの友達や貴族のまえで、そんなことはできない。だからこそ、ああいう『ティト』がプラハで受けたんだ。宮廷からのリピーターはなかつたらしいけどね」

飲みさしの冷えたコーヒーを、ジュースマイアーは、ぐい(ぐ)と飲んで、「じゃー」と衣裳戸棚に入ろうとした。次はニッセン(8)を寄越して、と声をかけたら、ちよつといやな顔をした。悪かったかな。でも今年のモーツァルト先生は、あちこち呼ばれて忙しいだろうし……。

(1) Franz Xaver Süssmayr (一七六六—一八〇三)。モーツァルト、のちにA・サリエリから舞台音楽の作曲を学ぶ。一七九四年ウィーン国立劇場のドイツ・オペラ楽長。

モーツァルト『レクイエム』の完成者として知られる。

- (2) Anton Paul Stadler (一七五三―一八二二年)。弟ヨハンとともに八七―九九年、兄弟でウィーン宮廷楽団の最初の常任クラリネット奏者を務めた。モーツァルトとはフリーメイソンの盟友としても温かい友情で結ばれていた(一七八五年九月二十七日、シュタードラーが「棕櫚の樹」ロッジに入会したとき、モーツァルトも立ち会ったと推測されている)。『皇帝ティトの慈悲』のクラリネットとバセットホルンのオブリガートも、モーツァルトが彼のために作曲したといわれている。

- (3) 『皇帝ティトの慈悲』はオーストリア皇帝レーオポルト二世がボヘミア王に即位するにあたり、一七九一年九月六日にプラハで催される戴冠式のおり、プラハ市民代表や諸外国の貴族諸侯の前で上演されるものであった。レーオポルト二世は、ヨーゼフ二世の弟。すなわちマリー・アントワネットの兄。

- (4) ヴォルテール『古代と近代の悲劇についての論文』(一七四八年)参照。「(…)わたしはティトがセストに次のような言葉をかける場面のことを言いたいのだ。《ここにはほくたちしかいない。皇帝ティトはここにはいない。友人ティトに腹を割って話せ。友を信じる。約束する、玉座につく者の耳には入らない、と》」

- (5) 「そこでティトが口にする言葉は、すべての王にとって永遠の教訓となり、すべての人間を魅了するであろう。《他人の命を奪うのは、どんな者にもできることだ。地上でもっとも卑しい者にさえ可能である。しかし命を与えること、これは神々や支配する者のみになし得ること

だ》人間の心のこの上なく高貴な感情にもとづいたこのふたつの場面は、フランスの悲劇的な音楽劇のもっともすぐれたものよりも、少なくとも三倍は永く後世にのこるだろう。」

- (6) 一七九一年八月二十五日、神聖ローマ皇帝レーオポルト二世とプロシア国王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世がフランス革命に対して、フランスの王位を守るためには武力行使も辞さないと言う決意を革命側に警告した宣言。これがフランス革命を強く刺激し、対外戦争の誘引となった。

- (7) 「私は自分が召使いだということを知りませんでした。それで破滅したのです」(一七八一年五月一二日付の父に宛てた手紙)

- (8) Nissen, Georg Nikolaus (一七六一―一八二六)。モーツァルトの未亡人コンスタンツェの後夫。『モーツァルト伝』を執筆。

(理工学部教授 ドイツ語・ドイツ文学)